

2021年5月

「コリーグ」54号 目次

巻頭言（1～2）各リエゾンセンターの活動について（2～5）科学研究会の報告（小林科学研究会）（6）第48回研究員集会について（7）外部評価活動について（8）2020年度の公開研究会（9～11）センター往来（11）2020年度公開研究会について報告（11～13）新任者・離任者から一言（14～20）情報調査室だより（21）

巻頭言



アンビバレント

阿曾沼 明裕

（名古屋大学教育発達科学研究科教授）

巻頭言を書くように依頼されて甚だ困った。巻頭言に相応しい内容は書けそうにもない。それで、最近思ったことを綴らせていただくことでお赦しいただきたい。

昨年11月に、日本高等教育学会の設立発起人のおひとりである原康夫先生からメールを頂いた。先生は高名な理論物理学者（素粒子論）で筑波大学副学長をされ、私が筑波大学の大学研究センターに助手として勤めていた時にセンター長として来られた。それ以後光栄にも親しくお付き合いさせていただいている。そのメールでは、原先生が若き頃アメリカのカリフォルニア工科大学、シカゴ大学、プリンストン高等研究所で研究をされていたことを回顧して書かれたエッセイを二つお送りいただいた。かつて学部生時代に（宇宙）物理学を志していた私としては眩しいばかりの内容だったが、その二つというのは「南部さんとの共同研究の回顧」「オッペンハイマーさんの思い出」というエッセイであった。ここでの南部さんとはノーベル賞の南部陽一郎先生である。オッペンハイマーさんとは、あのマンハッタン計画のオッペンハイマーである。「オッペンハイマーさんの思い出」では、原先生がプリンストン高等研究所で論文（プレプリント）を公表された際に、オッペンハイマー（当時所長）が自筆のコメントを原先生に送ってきた話がかかれており、その自筆のコメントが掲載されている。ちなみに原先生はさっそくオッペンハイマーの所長室に出向いてオッペンハイマーの誤解を解いて納得してもらったというから、さすがとしか言いようがない。

私事であるが、私は広島出身で身内にも被爆者がいた（今もいる）。オッペンハイマーのその後の苦悩や当時の歴史的な文脈を考えると、怒りの感情が起こるといようなことはない（ルーズベルトやトルーマンには怒りを感じるが）。むしろ原爆という意味で身近ではあるが、いわば歴史上の人物として遠い存在のオッペンハイマーと、私の上司であった原先生がやり取りをされたことに、妙な身近さを感じて（原先生を通じて勝手に身近に感じ

No. **54**

ただけだが) 不思議な感慨を覚えた。ちなみにオッペンハイマーは、原爆開発に関わる前には中性子星やブラックホールの先駆的な研究も行っており、また戦後には湯川秀樹先生や朝永振一郎先生をアメリカに招くなど、日本の素粒子論研究の発展にも関わっている。なお、オッペンハイマーと呼び捨てにしているのは悪意があるわけではなく、私にとっては歴史上の人物なので、例えば高橋是清と呼び捨てにしているのと同じである。

ただ、かつては学部生時代の終わりごろに、科学批判的で相対主義的な科学論(科学史、科学哲学、科学社会学)にどっぷりとはまっていた私は、科学の体制化や科学者の社会的責任について考えていた時があって、大教センター(今の高等教育研究開発センター)の大学院に入って研究テーマを考えめぐねているうちに、思い余って?金子元久先生に、「科学をコントロールするにはどうしたらいいんでしょうか?」と感情的に質問をぶつけたことがあった。当然ながらそのころは、科学研究の暴走を防ぐには当然研究規制をすべきだと考えていた。

科学が好きで理学部に行ったのに、つい批判的に科学を見てしまう、いわばアンビバレントな思いはその後も続く。昔の理学部の友人(研究者)のひとりから、いまは何の研究をやっているのかと聞かれ、学術政策のことなどやっていると答えて、その友人から研究振興のためにがんばってくれ!と励まされたときには、おいおい俺はそんなつもりじゃないんだよ(笑)、と心の中でつぶやいたこともあった。ただ、その後大学のことを勉強するうちに、それに自分自身が大学教員でいるうちに、さらには大学改革の進むうちに、やはり学問の自由は大事だと改めて思うようになった。というより、もともと学部生時代に過ごした京大の自由な雰囲気が好きで、そのために大学に関わりたい、大学の研究をしたいと思った経緯があるので、元に戻った感もある。産業政策的な選択と集中などには疑問を感じている。たださらに言えば、戻ったというよりも、いまでもある程度の研究規制は必要だと考えてはいるが、学問の自由と科学の社会的コントロールとのバランス(つまり、科学のガバナンスの問題)をどう考えるべきか、いまだ答えは出ていない。

昨年は、日本学術会議の問題や知財をめぐる安全保障問題、コロナ禍など、これに関わる問題が起きた。改めて科学のガバナンスを考えないといけないと思うこの頃である。

各リエゾンセンターの活動について

高等教育研究資源ナショナルセンター(HER-NC)の活動の紹介

HER-NC センター長 村澤 昌崇

(広島大学高等教育研究開発センター副センター長/准教授)

RIHE では、現在の高等教育に関する現状を踏まえ、高等教育に関わる研究と教育そして各種実践や経営を活性化し支援するための基盤として、リエゾンとして機能させるべく2019年に「高等教育研究資源ナショナルセンター」を設立いたしました。

高等教育の基礎的な研究と、そのための各種インフラ整備を主軸としつつ、学内外・国内外の専門家や関係者と連携しながら、若手研究者や経営実務の実践のご支援も視野に入れております。

今年度の活動は以下の通り

①公開研究会を通じた、高等教育研究の高度化に通じる理論的・方法論的研究の展開

2020.7.17 『IR よろず相談会(大学あれこれ放談会)』(村澤 昌崇・広島大学高等教育研究開発センター)

- 2020.7.20 大学機関の行動分析：合成コントロール法を用いた個別大学の取組・改革等の効果に関する因果推論の試み（東洋経済新報社との連携研究：『大学四季報』データ分析活用シリーズ1）（中尾 走・広島大学博士課程後期，田中 久貴氏・東洋経済新報社）
- 2020.8.4 高等教育と「エビデンス」を考える：『「エビデンスに基づく教育」の罅を探る－教育学における規範と事実をめぐって』を巡って（杉田 浩崇氏・広島大学准教授，熊井 将太氏・山口大学講師，佐藤 仁氏・福岡大学准教授，長谷川 祐介氏・大分大学准教授，林 岳彦氏・国立環境研究所主任研究員）
- 2020.8.17 「大学の質」が内々定に与える影響（東洋経済新報社との連携研究：『大学四季報』データ分析活用シリーズ2）（梅崎 修氏・法政大学，平尾 智隆氏・摂南大学，田中 久貴氏・東洋経済新報社）
- 2020.8.26 大学をとりまくマクロデータとEBPM：東洋経済新報社『大学四季報』を活用した大学改革・大学戦略策定・財務経営分析の試み（東洋経済新報社との連携研究：『大学四季報』データ分析活用シリーズ3）（黒木 淳氏・横浜市立大学准教授，松宮 慎治・広島大学博士課程後期）
- 2020.10.16 大学における研究倫理・研究公正を考える～特に人文・社会系領域を中心として～（野内 玲氏・信州大学）
- 2020.11.11 EBPMと高等教育：内閣府エビデンスシステム（e-CSTI）を巡って（宮本 岩男氏・内閣府 政策統括官，川地 信輔氏・内閣府 政策統括官）
- 2020.12.18 『IRよろず相談会（大学あれこれ放談会）』話題提供：佐藤 仁氏（福岡大学）（村澤 昌崇・広島大学高等教育研究開発センター）
- 2021.1.8 『IRよろず相談会（大学あれこれ放談会）』話題提供：田尻 慎太郎氏（北陸大学）（村澤 昌崇・広島大学高等教育研究開発センター）
- 2021.1.22 『IRよろず相談会（大学あれこれ放談会）』話題提供：立石 慎治氏（筑波大学）（村澤 昌崇・広島大学高等教育研究開発センター）
- 2021.2.26 『IRよろず相談会（大学あれこれ放談会）』話題提供：鳥居 朋子氏（立命館大学）（村澤 昌崇・広島大学高等教育研究開発センター）
- 2021.3.17 シリーズ・大学生の“今”を探る－マイナビ・大学生のライフスタイル調査から①（石田 力氏 東郷 こずえ氏・マイナビ株式会社，平尾 智隆氏・摂南大学，井川 静恵氏・帝塚山大学，村澤 昌崇・広島大学）
- 2021.3.29 研究大学における国際化戦略とその効果分析：広島大学の取り組みを事例とした因果分析（西谷 元氏・広島大学，村澤 昌崇・広島大学，中尾 走／樊 怡舟・広島大学博士課程後期）

- ②学校法人河合塾・KEI アドバンスからの受託研究費により，河合塾と共催による IR 研修および大学生調査の設計・監修を行った。
- ③東京大学大学院大学経営政策コースの両角亜希子教授と連携し，大学機関レベルのパネルデータ（2020年度版）を整備した。
- ④広島大学副理事の西谷元教授と連携し，広島大学の学生関係情報および BEVI データ，TOEIC データ等を連携させた，学生の成長に関する分析研究を行った（公開研究会2021年3月29日）。

教授学習支援リエゾンセンター（TLC-LC）の活動の紹介

TLC-LC リエゾンセンター長代理 蝶 慎一
(広島大学高等教育研究開発センター助教)

RIHE の教授学習支援リエゾンセンター（TLC-LC）は、2020年4月1日に教育室に設置された教育学習支援センター（CAPR）とのリエゾン機能を担っています。広島大学の学生自身が学修の成果を実感できるように教育学習環境の充実を促進するため、教育学習支援に関する基本的な情報収集・整理、調査研究を通じて、教育学習支援に関する実践に資することを目的としています。

教育学習支援センターでは、2020年9月に『TA 向け Hirodai TA ハンドブック』（全42頁）、2020年11月に『教員向け Hirodai TA ハンドブック』（全29頁）を日英両言語で新たに編集発行しました。これらのハンドブックは、教授学習支援リエゾンセンター（TLC-LC）で発掘・収集した大学教育についてのアカデミックな知見を活用するとともに、広島大学独自の教育システムや仕組みに関する「用語集」も盛り込むことで、TA や授業担当教員が日々の授業運営や学修者本位の教育サポートにも活用し易い内容となっています。これらは、教育学習支援センターのウェブサイトよりダウンロードできます。

引き続き、Hirodai TA 制度を定着、発展させるため、国内外の TA 制度にかかる情報収集、検討を進めることで、学内の会議等においても積極的に情報提供を行っています。また、学内における教育学習支援に関係する組織・センターとの連携に向けた基盤となる共同研究（Sato & Cho, 2021）も開始しています。

表 教授学習支援リエゾンセンター（TLC-LC）におけるウェブサイトの情報リンクの主な内容

新型コロナウイルスをめぐる大学教育・オンライン授業、TA等に関する調査研究、取り組みの動向
新型コロナウイルス感染症をめぐる大学教育・オンライン授業、就職活動等に関する各種調査結果（報告書）、ニュースについて、各大学等のウェブサイトの情報リンクを整理し、随時紹介しております。どうぞご活用ください。
新型コロナウイルスをめぐる海外大学等の動向（ニュース一覧）
新型コロナウイルスをめぐる海外の大学等の動向を調査・整理し、定期的に記事や特集を掲載してまいります。参考にいただければ幸いです。
新型コロナウイルスをめぐる海外の大学団体等の特設ページ
海外の大学団体等における新型コロナウイルスの特設ページ（基本的には継続的に更新されているページを紹介）の情報リンクを整理しております。ぜひご活用ください。

出典：教授学習支援リエゾンセンター「『新型コロナと大学』に関するまとめ」ウェブサイト (<https://rihe.hiroshima-u.ac.jp/liaison-center/learning-center/>) を参照し、筆者作成。

さらに、上記の表の通り、コロナ禍における海外大学の動向、オンライン授業のトピック、大学団体の情報集約の状況について教授学習支援リエゾンセンター（TLC-LC）のウェブサイトの情報リンクを整理し、定期的に更新しています。この調査研究の成果は、2020年度公開研究会（第1回）「新型コロナウィルスをめぐる海外大学等の動向と見えてきた課題—ニュース記事・調査報告を中心に—」（2020年6月10日オンライン開催）としても発信し、議論を深める機会となっています。

今後も学内外における教授学習支援の研究と実践を往還するような活動を進めてまいりますので是非ご期待ください。

【参考文献・ウェブサイト】

Sato, M., & Cho, S. (2021). *Potential roles of writing centers for writing related Faculty Development*. Miyokawa, N. (Eds.) *Opportunities and Challenges of English Academic Writing Education in Japanese Universities*, Hiroshima, *Reviews in higher education* 157 (pp.31-44). Research Institute for Higher Education, Hiroshima University.

広島大学高等教育研究開発センターの教授学習支援リエゾンセンター（TLC-LC）「広島大学 教育学習支援センター等との連携・協力」ウェブサイト

<https://rihe.hiroshima-u.ac.jp/2020/10/2-ta/>

広島大学教育学習支援センター（CAPR）ウェブサイト

<https://www.hiroshima-u.ac.jp/capr>

責任ある研究イノベーション・リエゾンセンター（RRI-LC）の活動について

RRI-LC リエゾンセンター長* 辰井 聡子
(広島大学高等教育研究開発センター特任教授)

責任ある研究イノベーション・リエゾンセンターは、高等教育機関における誠実で責任ある研究活動のあり方について多角的に研究し、その実践をサポートする機能も担っています。2020年度は、本学の人社系が人間社会科学研究科に再編されたこともあり、人文社会系で行われる「人を対象とした研究」の研究倫理に関する活動が中心になりました。

まず、RIHEのセンター長と協議しながら、RIHEの中に「人を対象とする研究」の倫理性向上のための仕組みを作りました。

人を対象とする研究とは、ここでは、個人や集団を対象に、聞き取り、アンケート、実験などの方法で、その思想や心身の状態、行動、環境、経歴等について、情報・データの提供を受けたり情報・データを収集して行う研究をいいます。RIHEでも比較的多く行われるタイプの研究です。今後、このような研究を行うためには、ガイドラインを遵守し、かつ、倫理審査を申請し承認を受けることが必要になります。

RIHEの人を対象とする研究に関連する規定として、次の2点が作られました。

- (1) 広島大学高等教育研究開発センター 人を対象とする研究に関するガイドライン（令和2年12月1日成立・令和3年1月1日施行）
- (2) 広島大学高等教育研究開発センター 人を対象とする研究に関する内規（令和2年12月1日成立・令和3年1月1日施行）

研究を実施する際に守るべき事項が定められているのが「ガイドライン」、倫理審査等の手続きが定められているのが「内規」です。今後、説明会などの開催も予定していますが、関連する研究を実施する方は、ガイドラインをよく読んだ上で倫理審査申請書（研究計画書）を作成し、承認を得てから行うようにして下さい。

第1回 研究倫理委員会は2月25日に開催され、4件の研究申請が全て承認されました。

本学では、これまで各部局が個別に倫理審査等を行ってきましたが（RIHEが2020年度もうけた手続きもこれに当たります）、今後、人間社会科学研究科で統一的な手続きを設けることが予定されています。現在はその仕組み作りに向けた議論が行われている最中で、責任ある研究イノベーション・リエゾンセンターもオブザーバーとしてこの議論に関与し、サポートを提供しています。「誠実で責任ある」研究の実施は、研究の発展、イノベーションの基盤です。今後も本センターの活動にご理解とご協力を賜りますよう、よろしくお願いいたします。

※執筆時点の役職

科学研究会の報告（小林科学研究会）

中尾 走
樊 怡舟

（広島大学大学院教育学研究科博士課程後期）

Research Integrity 問題について（小林信一先生）

Research Integrity（以下、RI）は、研究公正という訳語が与えられるが、本来は「研究不正ではない状態」を超える広い概念である。研究不正は、科学コミュニティ内の問題と言えるが、RIは、社会の科学技術に対する信頼や期待にも関係し、最近ではさらに安全保障としての意味も持ちつつある概念である。

RIは、アメリカで20年前に作られた言葉であるが、日本でも近年議論されつつある概念である。国家安全保障会議では、経済安全保障を確保するという観点から言えば、研究交流等を制限し、技術流出等を警戒しているが、科学技術・イノベーション会議では、RIの統制の上に交流を確保しようと、両者のバランスが難しい問題である。

これらは、政策レベルの議論であり、身近なこととして影響が出ていないと思われがちだが、例えば、中国ではリモート会議のソフトの使用が禁止である。アメリカではZoomの遠隔授業の際には録画禁止や学生を特定させないといった配慮が求められている。日本の大学でも、留学生に対するリモート指導を安全かつ安定的に実施できるかどうか、中国在住者の学生が日本国内の大学にVPN接続することは、いつまで安全で安定的かを考えなければならない問題である。加えて、研究者や留学生の受け入れに対して、経産省、文科省による安全保障貿易管理のチェックが一段と厳しくなっており、受け入れが困難になるという事態もある。共同研究に関しても、アメリカでは過去に中国との共同研究実績があれば、アメリカの大学との共同研究が禁止される可能性まであり、この点についてはアメリカが決めることであるため、対処の方法がない問題である。

STSと大学（小林傳司先生）

STS、即ち科学技術社会論は21世紀における科学技術と人間社会の新たな関係を築くという問題意識の下ででき、理工系と人社系の諸科学にまたがるトランスディシプリ的な性質を有しており、また科学ジャーナリズムや科学教育等、知識の流通と消費まで射程の広いもので、一般市民の役割も視野に入れている学問である。

STS的な議論は、まず、大学行政の観点からすることができる。研究型大学の場合、科学技術政策と高等教育政策の両方をウォッチする必要があることから、STSの人材が必要である。しかし現実では、執行部においてそういう人材が不足しており、高等教育政策の議論を単純に「文科省の下請け」と短絡的に理解してしまう人も多いという。また法人化以前の伝統を引き継ぎ、少しずつ減ってきているが、国立大学ではいまだに、研究部長、教育部長や総務部長などが文部科学省からきていることが普通である。文科省との情報交換や通達に役に立つ面もあるのだが、一方、執行部において大学独自の議論ができにくい土壌になり、しかも大学内部人材の養成にもネガティブな影響をもたらしている。

STSは学問論、大学論、科学論の要素、そして技術開発ではないメタ学的要素を持っていることで、変化する大学に対して、高等教育政策と科学技術政策の両方に目配りし、そして俯瞰性と歴史の視点を持つ分野である。また、STSは、「こうあるべし」という説教型の議論や具体的に介入する実践型の議論ではなく、その真ん中にある「提案型議論」を重視している。一方、そういった提案型議論の性質によって、STS自体の批判性の弱体化や制度確立による保守化も懸念されている。

第48回研究員集会について

大膳 司

(広島大学高等教育研究開発センター副センター長／教授)

2020年11月20日と12月4日の2日に分けて、「新型コロナ時代における大学教育」をテーマに第48回研究員集会をオンラインで開催しました。

2019年末に発生が確認された新型コロナウイルス感染症の世界的な流行によって、世界の経済活動が物理的な移動を最小化するシャットイン・エコノミーとマイクロツーリズムに移行した事で、多数の産業が深刻なダメージを負いました。大学の教育活動、留学生の受け入れ・送り出し、研究活動、卒業生の就職などもしかりです。

大学において、キャンパスは閉鎖され、教育活動はオンライン授業が主流となっており、研究活動は3密を避けて、個人的な活動は可能ではあっても、共同実験、海外渡航、フィールドワークを伴う研究などは十分に行えていません。2020年の年末まで留学生は来日できなかつたし、さらに深刻なことには、経済活動が停滞し親の収入は減少し、学生アルバイトも減ってしまい文部科学省や各大学の支援が求められています。来春卒業予定の就職内定率は芳しくありませんし、入試シーズンを迎えて、学部入試や大学院入試も学生が集まるのか、各大学での試験は実施できるのかなど心配ごとは山積みです。これらの事象は大学の経営にどのような影響を与えるのでしょうか？

本年の研究員集会では、これらの大学を巡る問題点に対して各大学ではどのように対応しているのかを探るために以下の4名の講師に報告いただきました。埴雅典氏（山梨大学大学教育センター長）には、新型コロナ時代に対応するために山梨大学において実践しているオンライン授業の実践と課題について、フク・カロリン氏（広島大学総合科学部国際共創学科長）には、所属学科での国際交流教育の実践と課題について、濱名篤氏（関西国際大学 学長・学校法人濱名山手学院 理事長）には、コロナ禍と法人・大学統合が同時進行している大学経営の実態について、志方弘樹氏（学校法人立命館専務理事）には、所属大学の立命館大学における大学経営について報告いただきました。

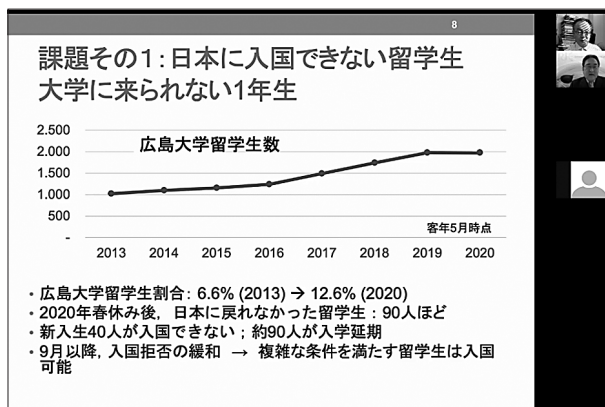
この研究員集会の詳細は、4月にセンターから刊行された高等教育研究叢書第162号（写真）に掲載とされておりましてそちらをご覧ください。

以下 URL よりダウンロード可能です。

https://rihe.hiroshima-u.ac.jp/publications/research_book/



※高等教育研究叢書第162号



※オンライン研究員集会の様子

外部評価活動について

大膳 司

(広島大学高等教育研究開発センター副センター長／教授)

国立大学法人等は第3期中期目標期間（平成28～33年度）の最終段階にはいって第4期中期目標の設定に迫られている。

本広島大学高等教育研究開発センターも第4期中期計画に向けてその準備に入った。その活動の1つが、2019（令和元）年10月から準備を始めて2020（令和2）年7月に「自己点検評価報告書」として取りまとめた自己点検活動であり、その年の8月27日にオンライン会議によって実施した外部評価活動である。

「自己点検評価報告書」の作成にあたっては、2019年10月からセンター内の自己点検・評価委員会で準備を開始し、同年12月のセンター運営委員会において、2020年度中に自己点検・評価報告書を作成し、その結果に基づいて外部評価を受けることが確認された。これに基づき、当センターでは2020年1月以降、自己点検・評価を開始し、その結果を2020年7月に「自己点検評価報告書」として取りまとめた。

その後、完成した「自己点検評価報告書」を、3名の学外の外部評価委員に送付し、検討してもらった。本来であれば、その検討結果を踏まえて、外部評価委員と当センターのスタッフとで外部評価委員会を開催し、議論すべきだったが、新型コロナウイルス感染症の拡大という異常事態に直面したことから、外部評価委員会をオンライン会議で開催した。

当センターは来年創立50周年を迎える。この間に、センター名称の変更もあり、当センターは現在、いわば第2期の期末を迎えつつある。当センターとしては、評価結果を踏まえて、大学をめぐる環境変化、高等教育研究の変容、学内環境の変化なども踏まえつつ、第3期のセンターの機能、形態、運営等のあり方を構想し、それに向けて改革を進めていきたい。

自己点検・評価、外部評価にかかわっていただいた外部評価委員のみなさまに謝意を申し上げます。



外部評価報告書は、以下の URL からご覧いただきたい。

https://rihe.hiroshima-u.ac.jp/about_rihe/activity_content/gaibuhyouka/

2020年度の公開研究会

開催した公開研究会のうち、講師の承諾のとれた資料・録画は、センター HP でウェブ公開 (https://rihe.hiroshima-u.ac.jp/video_and_materials/) しております。

また情報調査室にて視聴サービスもおこなっております。ぜひご活用ください。

* 肩書は当時のもの

	講 師	テ ー マ
第1回 (2020/6/10)	小林 信一 (広島大学高等教育研究開発センター長) 蝶 慎一 (広島大学高等教育研究開発センター助教)	新型コロナウイルスをめぐる海外大学等の動向と見えてきた課題 ーニュース記事・調査報告を中心にー
第2回 (2020/6/23)	三好 登 (広島大学高大接続・入学センター特任准教授)	日本の大学の英語学位プログラムへの日本人および外国人高校生の進路形成に与える重要な他者 (Significant Others) の影響に関する質的研究
第3回 (2020/7/7)	小竹 雅子 (島根大学研究推進室助教)	大学における研究倫理教育の定着：原理的考察の試み
第4回 (2020/7/14)	辰井 聡子 (広島大学高等教育研究開発センター特任教授)	ハラスメント対策の組織論
第5回 (2020/7/20)	田中 久貴 (東洋経済新報社) 中尾 走 (広島大学博士課程後期)	高等教育研究資源ナショナルセンター企画 大学機関の行動分析： 合成コントロール法を用いた個別大学の取組・改革等の効果に関する因果推論の試み (東洋経済新報社との連携研究：『大学四季報』データ分析活用シリーズ1)
第6回 (2020/8/4)	杉田 浩崇 (広島大学准教授) 熊井 将太 (山口大学講師) 佐藤 仁 (福岡大学准教授) 長谷川祐介 (大分大学准教授) 林 岳彦 (国立環境研究所主任研究員)	高等教育研究資源ナショナルセンター企画 高等教育と「エビデンス」を考える： 『「エビデンスに基づく教育」の闕を探るー教育学における規範と事実をめぐって』を巡って
第7回 (2020/8/17)	田中 久貴 (東洋経済新報社) 梅崎 修 (法政大学教授) 平尾 智隆 (摂南大学准教授)	高等教育研究資源ナショナルセンター企画 「大学の質」が内々定に与える影響 (東洋経済新報社との連携研究：『大学四季報』データ分析活用シリーズ2)
第8回 (2020/8/26)	黒木 淳 (横浜市立大学准教授) 松宮 慎治 (広島大学博士課程後期)	高等教育研究資源ナショナルセンター企画 大学をとりまくマクロデータとEBPM： 東洋経済新報社『大学四季報』を活用した大学改革・大学戦略策定・財務経営分析の試み (東洋経済新報社との連携研究：『大学四季報』データ分析活用シリーズ3)
第9回 (2020/10/16)	野内 玲 (信州大学助教)	高等教育研究資源ナショナルセンター企画 大学における研究倫理・研究公正を考える ～特に人文・社会系領域を中心として～
第10回 (2020/11/11)	宮本 岩男 (内閣府政策統括官付参事官) 川地 信輔 (内閣府政策統括官付参事官付主査)	高等教育研究資源ナショナルセンター企画 EBPM と高等教育：内閣府エビデンスシステム (e-CSTI) を巡って

	講 師	テ ー マ
第11回 (2020/11/18)	Jisun Jung (香港大学) Jiale Yang (精華大学) Wenqin Shen (北京大学) Jason Cheng-Cheng Yang (国立嘉義大学) Sheng-Ju Chan (国立中正大学) Soo Jeung Lee (世宗大学校) Seungjung Kim (韓国大学教育協議会) Sae Shimauchi (東京都立大学准教授) Yangson Kim (広島大学高等教育研究開発センター講師)	東アジアの修士教育と新型コロナウイルスの影響
第12回 (2021/2/2)	Jongsung Kim (広島大学人間社会科学研究科助教) 櫻井 勇介 (お茶の水女子大学講師) Yangson Kim (広島大学高等教育研究開発センター講師) 佐藤 万知 (京都大学准教授)	日本の大学の若手研究者：経験と課題を中心に
第13回 (2021/3/1)	Elsbeth Jones (リーズベケット大学名誉教授) Jos Beelen (ハーグ応用科学大学教授) 末松 和子 (東北大学教授) 池田 佳子 (関西大学教授) 米澤由香子 (東北大学准教授)	国際共同研究推進事業 令和2年度採択者による公開研究会 コロナ禍がもたらす国際共修・キャンパス国際化の新たな展開：欧州との対話
第14回 (2021/3/3)	黄 福涛 (広島大学高等教育研究開発センター教授) 三好 登 (広島大学高大接続・入学センター特任准教授)	黄福涛科学研究会 (基盤 B) ① 日本の理工系研究所における外国人研究者の特徴、役割と直面している課題
第15回 (2021/3/10)	大膳 司 (広島大学高等教育研究開発センター教授) 白川 展之 (新潟大学准教授)	黄福涛科学研究会 (基盤 B) ② 日本の理工系研究所における外国人研究者の雇用目的・方法と活用
第16回 (2021/3/12)	Valerie Otero (コロラド大学教授) 佐藤 万知 (京都大学准教授) 勝野喜以子 (成蹊大学教授) 蝶 慎一 (広島大学高等教育研究開発センター助教) 川本吉太郎 (広島大学博士課程前期)	教育学習支援センター共催 大学における学修者本位の教育・学習支援の新たな改革～ラーニング・アシスタント (LA) 制度に関わる国内外の事例から～
第17回 (2021/3/17)	石田 力 (マイナビ株式会社) 東郷こずえ (マイナビ株式会社) 平尾 智隆 (摂南大学准教授) 井川 静恵 (帝塚山大学教授) 村澤 昌崇 (広島大学高等教育研究開発センター准教授)	高等教育研究資源ナショナルセンター企画 シリーズ大学生の“今”を探るーマイナビ・大学生のライフスタイル調査から①
第18回 (2021/3/17)	李 敏 (信州大学講師)	黄福涛科学研究会 (基盤 B) ③ 日本の人文系研究所における外国人研究者に関する調査ー外国人の特性がフルに生かされているのか

	講 師	テ ー マ
第19回 (2021/3/24)	Yangson Kim (広島大学高等教育研究開発センター講師) Inyoung Song (韓国大学教育協議会) 陳 麗蘭 (広島大学博士課程後期) 黄 福涛 (広島大学高等教育研究開発センター教授)	黄福涛科学研究会(基盤B)④ 外国人教員・研究者に関する国際比較的研究—韓国, 日本と中国の事例を中心に—
第20回 (2021/3/29)	西谷 元 (広島大学副学長(SGU)) 村澤 昌崇 (広島大学高等教育研究開発センター准教授) 中尾 走 (広島大学博士課程後期) 樊 怡舟 (広島大学博士課程後期)	高等教育研究資源ナショナルセンター企画 研究大学における国際化戦略とその効果分析: 広島大学の取り組みを事例とした因果分析
第21回 (2021/3/29)	国分 峰樹 (東京大学博士課程後期)	国際共同研究推進事業 令和2年度採択者による公開研究会 「イノベティブな大学」に関する理論と実際

※上記の他, 今年度は, 『IR よろず相談会』を7/17, 12/18, 1/8, 1/22, 2/26の年5回開催しました。

センター往来【2020年4月～2021年3月】

*所属は当時のもの(敬称略)

<2020年>

4～5, 7～10・12月 なし

6月 細野光章(岐阜大学)

11月 宮本岩男, 川地信輔(内閣府) 竹内勝之, 吉野宏志(東京医科歯科大学) 細野光章(岐阜大学)

<2021年>

1～3月 なし

2020年度公開研究会について報告

11/18開催：東アジアの修士教育と新型コロナウイルスの影響

金 善良

(広島大学高等教育研究開発センター講師)

The 11th open seminar in 2020–2021 at Research Institute for Higher Education (RIHE) was held on 18 November 2020 via Zoom with the topic of *Master's Education in East Asia and COVID-19 Impacts*. Since the pandemic situation was not allowed to organize a face to face meeting on site, the nine speakers of five teams joined the seminar at their places, Hong Kong, Taiwan, China, Korea, and Japan. The simultaneous English-Japanese interpretation was provided to participants for the

first time in the open seminar at RHIE.

The open seminar was organized under the purpose of a wrap-up, and share opportunity for the results and main findings from the research project of *The Development of Master's Education and Its Quality Assurance in East Asia: A Comparative Study of Hong Kong, South Korea, and Japan* (PI: Dr. Jisun Jung) initiated in 2018 with the International Joint Usage and Collaborative Research (Type S) funding at RIHE.

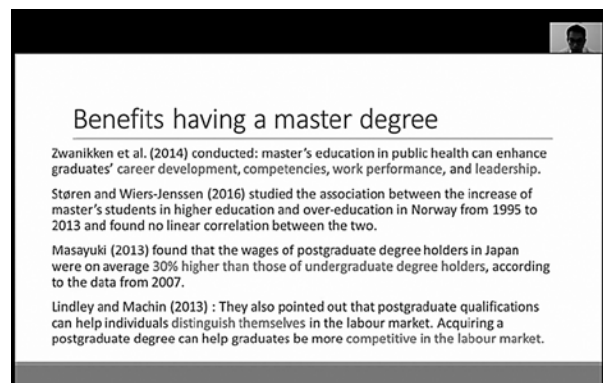
The project began with the following backgrounds. First of all, master's education is becoming more and more important globally, including in East Asia. Although an increasing number of students are enrolled in master's programs, and students have diverse backgrounds, it is still difficult to define the shared aims and nature of master's education. In East Asia, master's education has been expanded since the 1990s. Each country has different national and institutional policies related to the master's education. However, they confront common challenges in master's education, including internationalization policies and privatization trends.

The project had three key objectives: 1) To compare the historical backgrounds and critical characteristics of master's education in East Asia 2) To explore major government policies and their impacts in regard to master's education in East Asia, and 3) To examine the development of master's education in changing higher education environment.

Five teams presented their independent works with diverse master's education issues in each country and area that published the special issue in *Higher Education Policy*, one of the leading international journals in Higher Education. It was worthwhile to address the historical development of master's education in advanced Asian higher education systems and its contribution to their higher education and current challenges, including access, employment, career path of graduates, quality of learning experiences, and internationalization issues. Moreover, the speakers discussed the impacts of COVID-19 on graduate education based on East Asian contexts during the seminar.

The details of presentations in the seminar as follows.

- Master's Education in Hong Kong: Access and Programme Diversity
Jisun Jung (The University of Hong Kong)
- Master's Education in STEM Fields in China: Does Gender Matter?
Jiale Yang (Tsinghua University) and Wenqin Shen (Peking University)
- Massified Master's education in Taiwan: A Credential Game?
Jason Cheng-Cheng Yang (National Chiayi University) and Sheng-Ju Chan (National Chung Cheng University)
- The Effects of a Master's Degree on Wage and Job Satisfaction in Massified Higher Education: The Case of South Korea
Soo Jeung Lee (Sejong University), Seungjung Kim (Korean Council for University Education) and Jisun Jung (The University of Hong Kong)
- The Influence of Internationalization Policy on Master's Education in Japan: A Comparison of "Super Global" and Mass-Market Universities
Sae Shimauchi (Tokyo Metropolitan University) and Yangson Kim (Hiroshima University)



オンライン公開研究会の様様
(同時通訳を入れました)

3/12開催：大学における学修者本位の教育・学習支援の新たな改革 ～ラーニング・アシスタント（LA）制度に関わる国内外の事例から～ （教育学習支援センター共催）

蝶 慎一

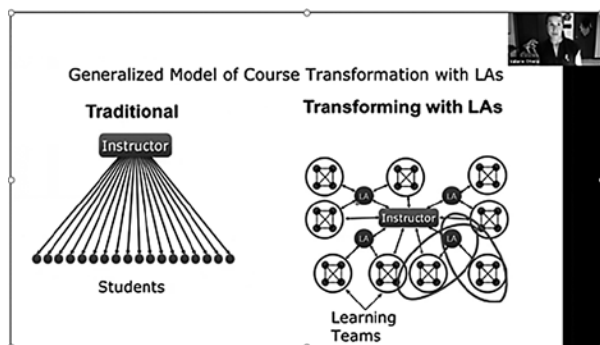
（広島大学教育学習支援センター（教員）／高等教育研究開発センター助教）

2020年4月に新設された教育学習支援センターと高等教育研究開発センターによる初めての共催で、2021年3月12日（金）、「国際フォーラム」（2020年度第16回公開研究会）が開催されました。本フォーラムのテーマは、「大学における学修者本位の教育・学習支援の新たな改革に向けて～ラーニング・アシスタント（LA 制度）に関わる取組事例から～」とし、国内外で教育・学習支援、授業支援に取り組む先進的な事例や知見を共有し、今後の課題を探ることを目的としました。参加者は50名を超え、国内の大学関係者のみならず、海外から一時帰国している大学院生が参加するなど本テーマの関心が高いことがうかがわれました。終了後もオンライン上で情報交換の時間を設定し、各講演者と参加者との相互交流の場を持ち、有意義なネットワーキングの機会となりました。

本フォーラムは、オンラインの同時双方向の形態で、海外事例としてアメリカのコロラド大学ボルダー校 Valerie Otero 教授から「The Learning Assistant (LA) Model and Its Impacts」と題して同大学の LA 制度の導入経緯とその特徴について詳細なスライド資料に基づいて講演をいただきました。その後、京都大学の佐藤万知准教授にもご登壇いただき、コロラド大学の LA 制度の全体像とその効果、日本の大学教育への示唆を含めて Valerie Otero 教授へのインタビュー対談が行われました。次に、国内の事例として成蹊大学の勝野喜以子教授から「授業への学生アシスタントの導入で何が変わったか？～成蹊大学 QLA の事例から～」と題し、同大学の学生アシスタント（QLA）による実際の活動や具体的な研修実態について詳しく報告をいただきました。続いて、本学の事例は、筆者から「広島大学教育学習支援センターにおける教育・学習支援と学生スタッフ」としてその概要を説明し、実際の学生スタッフによる経験の紹介として教育学研究科の大学院生の川本吉太郎さんから「教育・学習支援者としての経験～授業支援を超えた学生スタッフの役割とその可能性の考察～」と題して、学内で広大学生の学びを支援する学生スタッフの活躍のあり方と意義が示されました。

現在、本学の学生プラザ1階に所在する教育学習支援センターでは、TA（Hirodai TA）制度の企画・運用のみならず、新たに雇用された日本人及び外国人留学生の大学院生（QTA, TF 資格有り）の学生スタッフが、対面・オンライン双方を活用した「教育・学習相談」を日本語、英語、中国語の3言語で実施しています。また、2020年11月より COVID-19の学習環境下で学生スタッフ自らがアイデアを出し合い、「新入生懇話会」、「広大学生懇話会」等のイベントも主体的に行っています。

今年度も教授・学習支援リエゾンセンター（TLC-LC）を中心に、教育学習支援センター（教育室）との一層の連携、協力を進めながら、各種フォーラムやイベントを企画してまいりますので是非ご期待ください。



コロラド大学ボルダー校 Valerie Otero 教授による講演の様子



オンラインによる本フォーラムの開催の様子

新任者・離任者から一言

2021 年度客員研究員



佐藤 仁 (さとう ひとし)

福岡大学人文学部教授

この度は、客員研究員の機会をいただき、ありがとうございます。学部・大学院時代を広島大学で過ごしましたので、お声をかけていただき、大変嬉しく思っております。

私の専門は比較教育学で、アメリカの教員養成の質保証に関する研究を行っています。特に外部質保証としてのアクレディテーションの制度的構造や、内部質保証としての教員養成機関の実態を分析してきました。研究活動と並行する形で、前職では大学評価・IRの実務部署での活動を経験し、現在は所属大学の教学IR室長として教育情報の分析・報告や学生調査の開発に携わっています。研究と実務の両側面から、RIHEの活動に貢献できればと思っております。どうぞよろしくお願いたします。



埴 雅典 (はなわ まさのり)

山梨大学大学教育センター長/教授

RIHEの客員研究員にお招きいただきましてありがとうございます。私は専門が光通信・信号処理の工学者で、高等教育の

研究者ではありません。長らく学内教育ICTシステムの設計・導入に関与した後、2012年からいち早く、今でいう「反転授業」の実践に取り組んだ結果、所属大学の大学教育センター長を務めることになりました。近年は内部質保証システムの設計・実装、データサイエンス・AI教育の導入、新型コロナウイルス対応、教育FDの企画・実施、教学IRなどに携わっています。歴史あるRIHEの客員研究員としては知識・経験ともに甚だ心もとない身ですが、頂いた機会を有効に活かして、少しでも良い大学を後世に引き継げるよう努力いたします。ご指導のほど、よろしくお願申し上げます。



細尾 萌子 (ほそお もえこ)

立命館大学文学部准教授

客員研究員を委嘱いただき、ありがとうございます。とてもうれしく思っております。私はこれまで主に中等教育の観点から、フランスの高大接続の研究を行ってきました。

大学入学資格試験のバカロレア試験でどのような思考力・表現力が問われ、それが小学校から高校にかけていかに段階的に育成されているのかを検討し、貴センターの大場淳先生たちとともに、『フランスのバカロレアにみる論述型大学入試に向けた思考力・表現力の育成』という本にまとめました。今後は貴センターとかかわる機会を生かし、高等教育を研究しておられる先生方と交流して、高等教育の観点からも高大接続について学んでいきたいです。どうぞよろしくお願いたします。



戸村 理 (とむら おさむ)

東北大学高度教養教育・学生支援機構副センター長/准教授

この度は貴センター客員研究員の機会をいただき、大変光栄に存じます。私にとって「広島

のセンター」はとても大きな存在です。『大学論集』所載、横尾壮英先生の「大学教師に対するサラリー制の始まり」を拝読した際の感覚は今もお鮮明です。大学の「聖なる」イメージの裏側にある、いわば「俗っぽさ」を巧みに記述されており、大いに魅了されました。

そんな私にとって貴センターが所蔵する高等教育関係図書・資料は、極めて貴重で有益な学術資産です。現下、往来が難しい状況にはありますが、環境が許せば是非その学術資産を利用させていただければと思う次第です。戦後大学史・高等教育史研究を通じて微力ながら現代の大学・高等教育に寄与することができればと考えます。何卒よろしくお願申し上げます。



鳥居 朋子 (とりい ともこ)

立命館大学教育開発推進機構教授

このたびは客員研究員の機会をいただきありがとうございます。2度目の拜命を受け光栄に存じます(前回は2012-2016年)。

所属する立命館大学では、カリキュラム開発や

IR, FD, 内部質保証等に関する研究や実践に取り組んで参りました。多様性に富んだ学生集団を支援する大学のリーダーシップや教職員の構成においても、ダイバーシティ&インクルージョンが推進されています。学生や教職員の多様性を大学の活力として、いかに組織的な価値創造を図っていくかということに関心を持っています。高等教育研究開発センターから多くの学びを得て、私自身の視野を広げ思索を深める機会にできれば幸いに存じます。よろしく願いいたします。

山本 啓一 (やまもと けいいち)

北陸大学経済経営学部教授



この度は高等教育 RIHE の客員研究員としての機会を与您いただきありがとうございます。私は、これまで大学教員として教育に携わる中で、初年次教育の重要性に気付かされ、様々な実践を行ってきました。また、これまで2つの大学で学部長をつとめ、カリキュラム改革等の組織的な教育改革にも携わってきました。その意味では、私は大学教育改革に関する「実務家教員」と言えるかもしれません。以上の経験をふりかえりつつ、(ともすれば見過ごされがちな)学部長による「学部マネジメント」の重要性について、学術的な観点からも新たな知見を発信し、センターの発展に貢献できれば幸いです。

2021 年度学内研究員

清水 欽也 (しみず きんや)

大学院人間社会科学研究科教育文化講座教授



このたびは、学内研究員として貢献させていただく機会をいただきありがとうございます。私は一昨年度までは大学院国際協力研究科の教員として、そして昨年度からは大学院人間社会科学研究科の国際教育開発プログラムの担当として、主として発展途上国における科学教育について研究をしています。

その多くは初等・中等教育段階ですが、教員養成や教員の科学的能力の育成については、高等教育の果たす役割は非常に大きく、今後の改革にも目が離せないところだと感じています。どうぞよろしく願いいたします。



日山 恵美 (ひやま えみ)

大学院人間社会科学研究科実務法学専攻教授

このたびは、学内研究員就任の機会をいただきまして、誠にありがとうございます。本年度から本学においても法学部と法科大学院とが連携した法曹コースが設置され、法曹を目指す学部生の教育にも携わることとなりました。これまでの法科大学院における職業人養成教育の改革、発展が一層要請されるなか、皆さまからご指導ご助言賜る機会に恵まれましたことを機に高等教育につきまして勉強させていただきたいと思っております。どうぞよろしく願いいたします。

FUNCK, CAROLIN (フンク カロリン)

大学院人間社会科学研究科国際共創学科 (IGS) 教授/副学長



この度は、学内研究員を拝命し、誠にありがとうございます。私は1998年に広島大学総合科学部に赴任し、教養から大学院まで日本語と英語で地理学と観光について教えています。専門は教育と関係が薄いですが、2010年から2020年までの10年間、総合科学研究科の「教養教育研究開発プロジェクト」のメンバーとして教養教育のあり方を共同研究してきました。その中で、ヨーロッパで行われた Bologna Reform について研究し、大学教育の基準化と改革の課題を明らかにしました。また、2018年に総合科学部の学科として設立された国際共創学科 (IGS) の学科長を務めており、そのカリキュラム設計のため、英語で教えられるプログラム (English-taught program) について日々工夫し、学んでいるところです。教育研究は専門ではないですが、IGS で得られた経験を踏まえ、高等教育研究が専門の先生方と議論し、研究を発展させていきたいと考えております。よろしく願いいたします。

山田 浩之 (やまだ ひろゆき)

大学院人間社会科学研究科教育科学専攻教育学プログラム教授



このたび学内研究員を拝命いたしました。RIHE は私が研究者を志すきっかけになった場所でもあります。このような形で再び関係を持てることをたいへん嬉しく思っております。少しでも RIHE の活動のお役に立てるよう微力を尽くしたいと考えております。

私の研究領域は教育社会学で、教師やメディアについての研究をしております。高等教育に関しては大学生の学習をめぐる意識とその近年の変化に関心を持って分析してきました。また、地方での高等教育機関への期待とその役割を歴史的な視点で検討しています。この機会に高等教育に関する研究を充実させることができると考えております。よろしくお願いいたします。

2020年度離任者



辰井 聡子 (たつい さとこ)

再びウグイスの鳴く頃となりました。この1年(と少し)、遠隔での会議、授業、セミナーに、英語での授業など、たくさんの新しい経験をさせていただき、「禍」を感じることもない充実した毎日でした。直接お目にかかり、ゆっくりお話をするような機会がほとんどなかったのは残念でしたが、その中でも何かと親切に接していただき、大変感謝しております。大学からは離れることとなりますが、学問は続きます。高等教育への関心も持ち続けてまいりますので、道が重なり、一緒する機会がありますようにと願っております。



渡邊 聡 (わたなべ さとし)

アリゾナ州立大学サンダーバードグローバル
経営大学院教授・ディレクター
/内閣府上席科学技術政策フェロー

2008年に着任し、13年間お世話になりました。学内外の教職員の皆様に心よりお礼を申し上げます。広島大学では、毎日が新たな挑戦の日々でした。2011年3月から約一年半に亘り、カリフォルニア大学パークレー校客員研究員として活動した期間は、東日本大震災で被災した故郷福島を米国から無力に傍観するしか出来なかった一方で、自身の研究人生において、最も生産性の高い時期でもありました。学内外の多くの方々と共同研究をおこない、学生の皆さんと意見を交えることが出来たことが最高の成果物といえます。最後の5年間は、副学長(大学経営企画担当及び総合戦略担当)、上席副学長(総合戦略担当)、そして理事・副学長(グローバル化戦略担当)職を拝命し、激動期の国立大学経営に携わる機会も頂きました。今後は、学外者の立ち位置で、広島大学やRIHEを応援させていただきます。本当にありがとうございました。

修了生



川田 晃生(かわた こうせい)

博士課程前期修了(2021年3月)

指導教員である大場先生をはじめとするRIHEの先生方、事務室の皆さま、切磋琢磨した院生の皆さまのご指導・ご支援の

おかげで、この度、博士課程前期を修了することができました。コロナ禍という状況下でも、ほとんど変わりなく学習に励むことができたのは皆さまのお力添えのおかげです。心から感謝申し上げます。

博士課程前期を修了して思うことは、自分がひたすらに無知であるということ、そして、それを痛感できたことが、今後の人生の糧になりそうだということです。無知の知とはよく言ったものですが、その言葉の意味を少し理解したように思います。今後とも精進したいと思います。2年間本当にありがとうございました。



簡 攀宸(かん らくしん)

博士課程前期修了(2021年3月)

光陰矢の如し、瞬き二年の修士生活を送りました。

二年前入学した時はまだまだ全然未熟で、日本語科卒だけで何も考えずに日本に留学しようと決めました。そして、運命のルーレットが廻り始め、私は高教研の皆さまと出会い、修士の留学生という名の新しい人生に旅立ちました。学識も考慮も浅はかな学生なのに対等に議論してくれる先生方や、私の個性を受け入れてくれる研究室メンバーをはじめとするセンターの方々。今思えば、メールの返事忘れなどを含めて失礼なことをたくさんしてきたにも関わらず、温かく受け入れてくれたおかげで、のびのびと研究生生活を送ることができました。本当にありがとうございました。

これからが本番で社会に出て、波乱万丈の社会人生活を歩んでいくと思いますが、高教研で楽しく自由に研究できたこと、ここで少しでも成長できたことを胸に抱いている限り、迷わず新しい人生に踏み出せる気がします。



陳 心鈺 (ちん しんぎょく)
博士課程前期修了 (2021年3月)

この二年間、いろいろお世話になりました。振り返ってみると、専門知識を勉強したことだけでなく、修論作成を通して、ロジック的、批判的な考え方も身につけました。これは将来の人生にとって、大切な能力だと思います。また、RIHEはよく公開研究会を開催するので、授業以外に、日本国内外の高等教育研究者と交流する機会があります。様々な視点から高等教育学を研究するのは非常に有意義で、面白いと思います。

RIHEの皆さんのおかげで、充実した生活を送れ、順調に卒業でき、感謝しています。修士論文を書く際、「自分の研究をどう進めればいいのか分からない」と悩んでいる時がありましたが、指導教員の大膳先生をはじめ、センターの先生方からいろいろなアドバイスを頂き、改めてお礼申し上げます。今後は、RIHEで身につけた能力を生かして、職場で頑張りたいと思います。



中本 陵介 (なかもと りょうすけ)
博士課程前期修了 (2021年3月)

2年間という短い間でしたが、RIHEの先生方、院生の同期生、先輩方に大変お世話になりました。

振り返れば、社会人学生として入学し、会社業務後に授業を受け、課題・レポートをまとめるという日々は大変忙しく、苦しい時もありましたが、今考えると大変有意義な学生生活だったと思います。

また、研究の方向性が定まらず悩むこともありましたが、先生方や同期生に支えられ、無事修了することができました。

4月からはRIHEを離れますが、大学院で学んだことを糧に引き続き社会人として頑張りたいと思います。

RIHEの益々の発展を祈念しております。



方 可 (ほう か)
博士課程前期修了 (2021年3月)

この度、博士課程前期を修了致しました。2018年10月に研究生として、RIHEに入ってから、センターの諸先生方、事務の方々、先輩及び後輩の皆様が大変お世話になりました。最初に広島大学に入った時、不安でしたが、

授業でも生活の面でも、先生方はいつも親切に対応していただき、誠にありがとうございました。

一方、研究に関しても、授業から学んだ知識、研究方法を活用して、アンケート調査や聞き取り調査を実施し、卒業論文を執筆することを通して、研究に対する理解を深めることができました。

これから、中国に帰って、社会人として新しい生活が始まります。この二年間、RIHEで勉強してきた知識と経験を活かして活躍できるように頑張りたいと思います。

最後に、RIHEの益々のご発展を心よりお祈り申し上げます。



宮田 弘一 (みやた ひろかず)
博士課程後期修了 (2020年12月)

2016年の前期課程入学以来、RIHEの先生方、皆様方には大変お世話になりました。お蔭で、2020年12月に博士学位(教育学)を取得し修了することになりました。村澤先生をはじめとする皆様のご指導・ご支援のお蔭と改めて感謝申し上げます。

博士課程後期の在学中では、論文作成時に行うリサーチクエッションの設定、分析手法の設定、分析、考察等、あらゆる場面で壁が厚いことを実感しました。修了したとは言え、そのような壁を超えたとは認識していません。RIHEで学んだ経験を糧により一層、努力を積み重ねていきたいと考えております。今後とも、ご指導の程よろしくお願いいたします。最後になりますが、RIHEの益々のご発展を祈念しております。



潘 秋静 (はん しゅうせい)
博士課程後期修了 (2021年3月)

この度、広島大学高等教育研究開発センターにて、村澤先生、黄先生、藤村先生、大膳先生、金先生等先生方にご指導いただきましたお蔭で、「中国における独立学院の展開と将来：その教育効果の実証分析」というテーマで博士学位(教育学)を取得し、無事に卒業することになりました。また、センターの事務の方々、先輩及び後輩の皆様が大変お世話になりました。心から厚く御礼申し上げます。

この4年間半(研究生半年、博士学生3年、ドイツ留学1年)を振り返って見ますと、2017年の春に博士課程に進学した時に、「コリーグ」で「今後の3・4年間は、RIHEの優れた研究資源・施設を活用しながら、自分の研究を順調に進めたい」

という夢を抱いておりましたが、2021年の春に、「博士学位」という成果とすることができました。努力と夢があれば、RIHEはそれを実現することができる場所であると思います。

RIHEを卒業したのはほんの始まりで、あとはここで学んだ専門的知識・能力・資質及び、「人」として「平和・感恩・互助」という価値観を今後の人生に生かしていけることができるよう、精進してまいりたいと思います。今後も高等教育に携わっていきます。引き続き、どうぞよろしくお願い致します。



真鍋 亮 (まなべ りょう)
博士課程後期修了 (2021年3月)

30歳を迎えたその日、自身の生き方・働き方を考えた。そこで出した答えはこうである。20代は多様な挑戦により可能性を広げる。30代は進む道を決めそこで根を張る。40代は花が咲くかの如く成果を発揮する。50代は後進に引き継ぐ。では今何をすべきか?と考える30歳で修士課程へ進み、32歳でRIHEの門を叩いたのである。

2014年発行の同誌47号にて、入学の動機をこのように述べた。それから歳月を経て、40歳となる節目の年に修了させていただく事となった。この事から、私の人生における「根」は、その大半がRIHEでの学びにより形成されていると考える。良き師に出会い、環境に恵まれ、本当に充実した時間を過ごさせていただいた。

時代の変化は激しく、今や後進への引き継ぎは50代から60代の役割へ移行しつつある。これを活躍の機会が10年延長されたものと捉え、今後さらに精進していく所存である。

新入生



薛 嘉禾 (せつ かか)
博士課程前期入学 (2021年4月)
※研究生より進学

2021年4月より博士課程前期に入学した薛嘉禾と申します。2020年10月の研究生として入学しましたが、コロナのせいで日本へなかなか来られませんでした。

日本に来た今、村澤先生をはじめ、諸先生方と先輩に大変お世話になっております。定期的に各種課程に参加することで、高等教育に対する初歩的な認識を形成しました。香川大学に交換留学し

た時、日本の文化をしみじみと感じると同時に、教育学の研究に国際的な視点が不可欠だと意識しました。

私は大学のカリキュラム改革と大学生の就業に関する研究に興味があって、これからも先生達のご指導の下で一生懸命頑張りたいと思っています。今後もよろしくお願ひいたします。



談 之兮 (たん ちし)
博士課程前期入学 (2021年4月)

初めまして。2021年4月よりお世話になる談之兮と申します。中国の教育学部卒業後、さらに高等教育に興味を持ち、日本に進学することを憧れていました。現在は大学の国際化や、アカデミックプロフェッションなどについて関心を持っています。

コロナ時代で学校の皆さまと一緒にたくさんの困難を克服し、歴史と伝統ある広島大学のRIHEに受け入れられて大変感激だと思ひ、これから院生としての学習生活がとても楽しみです。先生と先輩たちのアドバイスと同期の皆さんからの良い刺激のもとで、高等教育や世の中の事情に対する独自の観念と思考を獲得するため、今後も精一杯研鑽を積んで行きたいと思ひます。何卒宜しくお願ひ致します。



丁 秀玉 (てい しゅうぎょく)
博士課程前期入学 (2021年4月)
※研究生より進学

2021年4月より博士課程前期に入学した丁秀玉と申します。研究生として入学してから、センターの先生方や先輩たちにいろいろお世話になり、心より感謝申し上げます。

私は2019年に3+1プログラム生として広大に来ました。2020年10月に研究生としてRIHEに入ってから、充実した毎日を送っており、高等教育だけではなく、社会科学全般に対する視野が広げられる予感があり、これから院生としての勉強や研学生活をととても楽しみにしております。

今後は国際化の課題をめぐり、大学生の海外進学志向について研究していきたいと思ひます。まだまだ知識が足りないですが、有意義な2年間を過ごせるよう、しっかり勉強していきたいと思ひます。これからもよろしくお願ひ致します。



馬 晨崢 (ば しんそう)
博士課程前期入学 (2021年4月)
※研究生より進学

はじめまして！2021年4月より博士課程前期に入学した馬晨崢と申します。コロナ禍に日本に来て、RIHEで先生や先輩方に会えるのが大変でしたが、そのおかげで、今センターの一員としてより幸せだと思っています。

私は大学で学生たちの思考力の育成に関心を持っています。ものごとを学際的・総合的に捉えられる能力を養うことを目指す教養教育で、学生のインターアクションと批判的思考の関係性を明らかにしたいと思っています。

これからもっと頑張ります。この春よりよろしくお願い致します。



葉 茜 (よう せん)
博士課程前期入学 (2021年4月)
※研究生より進学

2021年4月により博士前期課程に入学した葉茜と申します。高等教育に興味を持って2020年10月から研究生としてRIHEに入り、充実した半年間の研究生活を過ごしました。

2020年はコロナ禍で入学手続きや研究・勉強が大変でしたが、黄先生をはじめ、諸先生と先輩方からお世話になり、心から感謝しております。

私は英語による学位プログラムに関心があり、センターの素晴らしい施設と資料などを生かして、先生達のご指導を受けながら、日中の大学における英語修士学位プログラムについての比較研究を進めたいと思っています。私にとって高等教育学は、今まで触れたことのない専門分野であり、関連知識を少し学びましたが、自分の能力不足を深く感じていますので、これから一生懸命に勉強しなければいけないと思っています。今後もよろしくお願い致します。



劉 函儀 (リュウ カンギ)
博士課程前期入学 (2021年4月)

はじめまして。2021年4月よりお世話になる劉カンギと申します。日本に留学する夢を叶えるために、2017年大学を卒業して一旦仕事をしておりました。2019年4月から二年間京都に住んでおりました。今は基礎能力も語学能力も大変不足なので、自分の研究テーマを決めることすら難しく感じますが、自分自身の方法

論や分析をできるように、または何かに役に立つ論文や考えをできるように、これからもっと努力しようと思っています。同級生の皆さんと一緒に切磋琢磨することをとても楽しみにしております。どうぞよろしくお願い申し上げます。



寺倉 憲一 (てらくら けんいち)
博士課程後期入学 (2021年4月)

この度、博士課程後期に入学した寺倉と申します。国会の調査部門において、国会の立法活動を補佐するため、主に文教科科学技術分野の調査研究に携わってきました。高等教育研究開発センターの前身である大学教育研究センター創設時のメンバーの一人である故・喜多村和之先生は、職場の大先輩に当たられます。この10年ほどは高等教育について論文を執筆することも多く、これまで勉強してきたことを、専門家の御指導の下で、きちんとまとめ直したいと思うようになり、本専攻への進学を希望いたしました。在職のまま入学しましたので、仕事と勉学を両立していけるのか不安もありますが、先生方、同級生の皆さんに教えていただきながら、研究を進めていきたいと思っています。どうぞよろしくお願い致します。

※上記の方々以外に、2021年4月は、康 凱翔さん(前期課程より進学のため省略)と、小嶋 緑さん(研究生より進学、前年掲載のため省略)が博士課程後期に入学されました。

研究生



莫 晟 (ばく せい)
(2020年10月入学)

はじめまして、2020年10月から研究生として入学した莫晟(ばくせい)と申します。RIHEに入って研究生生活の中、諸先生と先輩の方から多くの経験をいただき、お世話になっております。

研究生生活を充実するため、積極的により多くの研究領域に足を踏み入れ、授業と研究の中から自分の不足を痛感し、これからの研究の経験としてもっと努力しなければならないと思っています。私は大学国際化に関する研究に関心を持っていて、大学の留学生受入れ制度を中心に研究を進めています。

研究生の生活を生かし、博士課程前期への入学

を目指して頑張りたいと思います。高等教育研究開発センター（RIHE）で研究することは人生にとって素晴らしい経歴として楽しみにしております。よろしくお願ひいたします。



胡 靖宜 (こ せいぎ)

(2021年4月入学)

はじめまして、2021年4月より研究生として入学した胡靖宜と申します。入学する前から先生や先輩方が多くの勉強資料を推薦してくださり、感謝の気持ちでいっぱいです。

今年は新型コロナウイルスの影響で、ビザ発行が中止されてしまい、予定通りに4月に入学することが難しいです。勉強が順調に進むように、先生と先輩方がいろいろ努力をしてくれ、心より感謝しております。今は、先生のご指導でオンライン授業を受けております。私は中国東部と西部の高等教育の入学機会の不平等に関する研究に興味を持っており、これからも先生のご指導の下で、先輩たちと一緒に研究を精一杯がんばりたいと思っています。以上です。よろしくお願ひいたします。



蔡 媛 (さい えん)

(2021年4月入学)

2021年4月より研究生として入学した蔡媛と申します。

来日してから2年半語学学校で留学生活を送りました。この期間に、コロナ禍の影響で日本語能力試験と対面授業が一時停止となり、様々な不便と圧力を感じました。しかしながら、それが故に高等教育に関する知識の学習と研究の信念をますます固めました。

私の研究テーマは日中高等教育の現状に基づいて、科学技術イノベーションから高等教育にもたらす課題ということです。

私から見ると、自分が興味を持っている知識を学び続けることが人生の中でとても幸せなことだと思います。先生達のご指導のもとで、大学院への進学を目指して努力しながら、科学技術イノベーションに絡む高等教育課題を研究したいと思います。これからよろしくお願ひ致します。

情報調査室だより

SNSのご紹介

Twitter : <https://twitter.com/rihejohoshi>

Facebook : <https://www.facebook.com/rihejoho>



文献情報総合検索



<https://rihe.hiroshima-u.ac.jp/search/>

【写真でみる情報調査室】

第一書庫 図書と雑誌を配架しています。国内大学の大学史は大学名順に別置きし、
利用しやすいように工夫しています。

